

第35回大阪支部研究大会（豊中大会） 研究のまとめ

研究局長 古川宗治（奈良市立鳥見小）

ア．陸上分科会

渡瀬 克美（泉州ブロック）

① 分科会 I

提案者 岸和田市立旭小学校 5 年担任

梅山和也先生

参加者 14 名・会員 8、未会員 5、学生 1。

② 陸上分科会の基本的な考え方について

今回の入門及び実践報告のコンセプトは『初参加者にも分かり易く、一緒に授業を創っていくことを大切にしたい分科会にしよう』だった。それが、参加者を増やすことにつながることも考えた。そこで、担当した泉州ではブロック委員会で前もって 2 つのレポートを聞き、どのような話をすれば初参加者が分かり易いか整理した。勿論骨子そのものは提案者の意向を大切にしたい。これを可能にしたのは大会が 11 月であったことが大きく影響している。いつもなら 7 月大会で原稿を出すことに精いっぱいの中身の推敲をブロック全体で議論するゆとりがない。この時期だからこそできたのである。

③ 入門提案の中身

まず、同志会の考えることにもつけたい力をつぎの 3 点を提示した。

ア．「（運動や技が）できる」

イ．「（その運動や技がどのようにすればできるようになるのか）分かる」

ウ．「（「できる」「分かる」ために、グループで）学び合う」

とした。そこで低・中・高別の教材は、低学年の障害走（「魔界からの挑戦状」。中学年では「リレー」。高学年では「ペースランニング」で具体的に提示した。低学年では、ボディコ

ントロールをする楽しさ。中学年ではリズムカルな走運動の楽しさと段ボールの置き方で「走の」意識が焦点化されリズムよく気持ちよく走ることができ、また、考える楽しさや個人内到達度評価によるモチベーションが高くなる。そして、高学年のペースランニングの学習では更に自分のペースで走る力（「速く走る」から「うまく走る」）という出来高でない評価を子どもたちに提示できることを報告した。その結果未会員の人にとって同志会実践のすばらしさを実感してくれたと思われる。

参加者の感想

・体育の学習を子どもたちと楽しみたいと思い、そのためにも勉強しようと思い、参加しました。同じ手順でやってもベテラン先生と差が生まれる。入門の実践質疑は話しやすい雰囲気、悩みや想いを共有しながら様々なことを提案していただき大変勉強になりました。

・実践例に触れ、同志会の体育への教育性について知ることができました。とても考えさせられることが多く、特に「出来る・できない」が苦手意識を生み嫌いににつながるかもしれないが、評価が「やりがい」には必要。しかし教育性を高めるには「分かる・わからない」と気づく面白さを追加し、そこから学びの疑問へ広げていく。ここに子どもたちの楽しさ・面白さが詰まっていると思いました。勿論子どもたちは、楽しさや面白さに夢中になるところから、導入していく工夫を考えていきます。

④ 分科会 I-2 実践報告及び実技

実践・実技提案者 岸和田市立八木小学校 2 年担任 増田 樹紀先生

参加者・・・14 名(入門提案に同じ)

実践報告は 2 年前の新任 6 年目の 4 年生実践である。段ボールを使ったハードル実践である。クラスが少し落ち着かずなかなか難しい中での実践であった。

段ボール箱を等間隔に置き自分に合ったインターバルでリズムよく・気持よく走ることをねらいにした実践報告であった。距離は 40 m でフラット走と段ボール走の差を評価基準とした。当時を振り返り、次回実践するとしたら改善すべきことを明らかにしながら再整理したものであった。そのため、初参加者にも一緒に授業を創っていきやすいものであった。質問の中で、「なぜ本物のハードルを置かず段ボールなのか？」に対して、走運動の 4 歩分が最小サイクルでその疾走 4 歩分がインターバルに近いことを前提に、10 m 以降の 4 歩分を測り、そのことを頭に入れながら段ボールを等間隔に置いた。つまり中学年での障害走はいわゆる高さを意識した学習ではなく、走運動（短距離走）を基本に据えリズムカルに気持ちよくフラット走と同じように走る学習が大切であると捉え、高さを求める学習は小 6 以降で十分であると考えた。このことにより、高さに対する怖さを回避することができ、全ての子どもが参加しやすくなった。個人内到達度評価であることからみんながやる気をもって参加できることを参加者も経験を通して、目標 0.1/台のロスタイムを完全に達成できて「嫌だったハードル走が楽しくなった」という感想を聞くことができた。

参加者の感想

・「百聞は一見にしかず」の実践報告でした。実践者自身が困りながら取り組んでいた様子が、私自身の過去と重なり「そういえば、自分もこうだったな」と共感しながら聞いていました。今回の実技では「こちよさ」をいかに子どもに分からせるのか、・・・略・・・ハードルは教えたスキルが多いですが「今、

この子どもたちに何が必要なのか」が分ければ、教えたい中身も整理されると改めて思いました。

⑤最後に

入門提案の感想を泉州ブロック「長老」船富公二さんが次のように書いてくれた。

「・陸上、梅山 T の入門でした。梅山さんは体育の後に国語や特活になるように 時間割を組んでいるそうです。なるほど！ 泉州ブロックには素晴らしい後継者が育っていると思った」嬉しい話で。泉州ブロックが陸上を担当して、ようやくブロック全体としても力がついてきたように感じる。また、1 日完結編の支部大会は我々にとってもよかった。何故なら二日目には別な自分の学びができた。ありがとうございました。

イ．民舞分科会

森 麻子（北河内ブロック）

7 名と少人数の参加だったが、「民舞で何を学ばせたいのか。」「何を大切にしたいのか。」について深く議論ができた。

入門提案の大西実践（4 年生）は、コロナ禍における 11 時間の運動会練習の中で「向き変え」にこだわった。グループノートを通して、荒馬の歴史や教えた技術をおさえ、3・4 年の学年間の学び合いを保障し、子どもたちが創り上げる「荒馬」の実践があった。

実践提案の林実践では、「運動会で荒馬をやるということ」について掘り下げた。何を教えたいのか？荒馬の本質は何なのか？全国の民舞分科会との考え方とも照らし合わせながら議論した。荒馬とは馬と共に生活する（馬へのリスペクト）仕事の踊りであり、願いと合致する「なんば」の動きが踊りの本質にあることがわかった。

低・中・高学年に応じて、馬づくりや動きの意味、体の動かし方を学びながら「踊りの

本質」を追究することで、より自由で豊かな「荒馬」が運動会で実践できると学んだ。

参加者の感想「子どもたちの映像を見ると、荒馬の指導者が何を大切にしているのかよくわかった。民舞の本質を失わないような教材化がますます求められていると思うし、そういった実践がどんどん出てきて欲しいと思う。」「民舞をどうとらえるか。いろんな意見に振り回されるが、取り組んだ後子どもたちに何が残ったのかを考えておくといいなと思った。」「民舞を教えてもらう意味も教えてもらい、子どもたち主体の進め方などがわかりやすかった。来年実践したい。」

ウ．障害児体育分科会

辻内 俊哉（障害児体育プロジェクト）

① 分科会Ⅰ

辻内が入門提案を担当。「障害の捉え方」として、「障害は（健常児とは）異なる発達をする」すなわち、個々により成長の過程が変わることや、障害はマイナス面だけでなく、「やりたくてもできない」蓄積が爆発的成長の起爆剤になること、「発達の最近接領域」の考えを紹介した。また、運動文化を素材とし、子どもの願いや教師の思いから文化を子どもが学べるように教材化する視点を説明した。特に学習指導については中核となる教えたい中身を深化発展させるスモールステップな授業づくりや、道具の情報が子どもの「わかる」を知覚的に引き出す「アフォーダンス理論」を紹介した。

実践報告は沖村先生による「風船バレー実践」だった。子どもたちの学びを深めるため、ルール作りに苦心されていたが、子どもたちの積極的な活動をうまく引き出した実践といえよう。質疑の中心はそのルール作りについて。

- ・ルールを押しつけない。

- ・子どもの意見を取り入れる。

- ・敢えて矛盾を持ち込み、それを子どもが解決することも大切

といった意見が土佐さんから出され、井上さんからも「4歳を超えるとルールのあるあそびができるようになり、ルール作りを子どもたちとすることもある。ある日、こおり鬼をしていて、挟み撃ちをされ、アウトになってしまった園児が『はさみうちは嫌だ』と訴える場面があり、一度『挟み撃ちはなし』というルールを設定してみた。するとやっぱり面白くない。するとその子が『挟み撃ちルールの復活』を要望した。保育園はゆったり、そういうことを取り組む時間がある。」と言った事例の紹介があった。

② 分科会Ⅱ

OB会の土佐さんと連携し講座を開設した。笹田さん「ボッチャの実践」奥さん「校内での取り組み」2本の実践レポートもあったが、詰め込みすぎて時間的に中途半端になってしまった。

土佐さんからは卓球バレーを紹介しました。定規ぐらいの板がラケット替わり。両手でラケットを持ち操作すると、あまりスピードが出ないが、片手で操作すると両手と比べ物にならないぐらい勢いのある球筋になり、緩やかなレクリエーションから一気にスリリングな本物志向のスポーツに早変わりした。このギャップも卓球バレーの醍醐味なのだと実感できた。土佐さんは「はじめは障害者のためのスポーツを作ろうと熱心に研究していた。今は、アダプテッドスポーツ、ユニバーサルスポーツとしての視点でスポーツを作ろうとしている」と言っていた意味が、よくわかった気がする。

エ． 運動会分科会

菅 耕史（北河内ブロック）

① 分科会Ⅰ

初めに研究部の楠橋さんから、コロナ禍で大阪府内の学校の運動会が大きく変更せざるを得なかった現状と、その変更の意思決定や学校での論議などについて、支部の会員へ行ったアンケートの分析から話があった。以下はその内容と問題提起にもつながると思う。各市町村・校種などで実施方法や制約内容、時期、名称（運動会と言わない体育参観など）など違いはあったが、共通していたのは現場の教師や子どもたちに意思決定の権限がなかったということは共通していた。教育課程の編成権は各学校にあると言われながら、各学校で「運動会をどうするか（運動会だけではなく全てにおいて）」という議論なくトップダウンで指示が下りてくる。そこには教師の裁量権など見つけられなかった。しかし、一方で指示待ちに慣れてしまっている大阪の教師の姿も顕在化されたのではないだろうか。我々、同志会員も同じ状態になってしまっていた。そこで、今もう一度、「運動会ってなんですか？」「子どもたちにどんな力がついて、どんな価値があるのか？」と問い直すことで、学校全体の教育活動を見直すきっかけになるのではないだろうか。今年の苦い経験（ピンチ）をチャンスと捉えて来年度以降につなげていきたい。

② 分科会Ⅱ

岨実践は、今年6年担任になったが休校になり、その中で運動会も中止になるという状況からスタートした。教師もなかば仕方ないとあきらめていたが、子どもたちの休校中の日記に「運動会をやりたかった。」という言葉を見つけ、「子どもたちの純粋な要求やエネルギーに大人（教師集団・保護者）が動かされた。」ことが実践の動機になっている。

自治ということも意識しながら実践されていたので、「今まで教師がしていた企画や計画を子どもたちへ任せていった。」ことで、各実行委員会の子どもたちが、休み時間や放課後などを使って、どんどんと主体的に動き出していったのではないかと思う。また、途中に上野山先生からコロナについての授業で学習したことも大きかったと岨先生は語られた。

吉澤実践は、同僚性・学校作りの視点でも学ぶところが多かったです。「先生が教え込んでも達成感は味わえるけどそこで終わり。運動会をしてそこで終わるのはもったいない。」という意識を持たれて、体育の授業（側転）を演技の中核にし、技や構成も子どもたちと考え創っていかれていました。「自治とは、誰かのせいにしない。自分たちのことに責任を持つ、ということだと思います。」とご自身の経験から語られました。

また、春開催を逆手にとって「春開催は、学校に一石を投じることができる。運動会は、教師集団と子どもを変える可能性がある。」と言われてもいました。

記念講演の神谷先生も運動会や体育祭についての話だったので、一日どっぷり運動会とは？自治とは？ということを考えることができました。

オ． 授業づくり分科会Ⅰ

① 古川宗治（奈良ブロック）

② 佐々木盛文（南河内ブロック）

（１）器械運動（マット）

授業づくり（マット運動）には、小学校（低高）教員や、大学生の参加がありました。

初めに、マット運動について同志会が大事にしていることを座学にて紹介しました。実技は、2つのグループに分かれて以下のように進めていきました。

①ねこちゃん体操

②動物あるき、お話マット

③側転

時間の都合でここまでになりましたが、

④連続技づくり

まで計画していました。

ねこちゃん体操では、その動きの意味や、見るポイント、補助の仕方や学年別の到達点について紹介し、実際に参加者にも体験してもらいました。

続いての動物あるきとお話マットでは、低学年への指導について、様々な子どもの姿をふまえながら授業での指導方法について説明しました。

側転の指導は、同志会ならではのスモールステップで、参加者の動きもどんどん良くなっていきました。

できれば、その続きの連続技まで行きたかったのですが、残念ながら時間が足りませんでした。

今回は感染症対策として、個人用のマットを使用しました。参加者も意識が高く、頻繁に消毒をしてくれていました。

また、高学年の内容（集団マット）についても、紹介のみになってしまいました。

講座内容については、参加者の構成を見てから調整しましたが、中学校希望の大学生もおられたので、その辺りのフォローができませんでした。今後も、中学校志望の学生が参加してくれるなら、その要望に応える内容も入れていく必要があるかと思います。

（２）球技（手）

手で扱うボール運動の実技。教材は「シュートボール」「バスケットボール」を取り上げた。シュートボールに関しては、一人1つつボールをもって、投げる（受ける）機会を保障することの大切さを確認し、オールコート1 v s 1 ではボールへの寄り付きの経験をたくさん積み重ねることの重要性も確認した。

オールコートでは速攻の有効性、ハーフコートでは重要空間やノーマークの認識、攻めと守りの位置など、細かい学習内容を設定しながら進めていくことを確かめていった。

バスケットボールに関しては、多くの時間を割くことができなくて、端折る形の提案となってしまった。ハーフコートの学習にしばらくこんで、子どもたちのプレーから有効な作戦、有効な動きをVTRから導き出す授業の方法を確認した。

どちらも重要空間をいかに認識して、苦手な子どもでも動き出せるようにするかが大切であることも確認することができた。

ボール運動でもどうしてもバスケットの授業をていねいに確認する時間がとれなくなってしまうのがむずかしいところです。

力．器械運動分科会

窪田 浩尚 （中河内ブロック）

日曜日に開催した器械運動分科会は初参加者も含めて9名の参加でした。はじめに日名先生の入門提案「豊かな身体表現のおもしろさの追求を」でした。資料として教育と脳科学についても話をしてもらいました。低・中・高学年で学ぶ内容を系統的に、かつわかりやすくまとめて話をしてもらいました。

その後は窪田の実践報告「一瞬を一瞬で終わらせない跳び箱運動」でした。4年生で取り組んだ音楽跳び箱・マット表現についての報告です。発問を通して学習をすすめていくことを意識し、グループで教え合い・話し合いながら取り組んだ様子について紹介しました。実技ではマット運動について主にお話マットから側転の指導について取り組み、跳び箱では横跳びこしから参加者で音楽跳び箱・マット表現づくりに取り組みました。パプリカの曲に合わせて方形に組み合わせたマットのどこに跳び箱を置くかを相談し合い、真ん

中に1個置いて表現する方法を考え合いました。音楽表現をするときは、マットや跳び箱の配置・音楽（できるだけカウントのとりやすいゆっくりな曲の方がいいのかも）・技をそろえるようにみせることが大切な要素だという考えを共有しました。東京支部の吉澤先生にも参加していただき、マット運動での目と手の協応動作や側転指導のポイントについてもわかりやすく教えていただきました。

＜参加者の感想＞

・マットやとび箱における実践をビデオで観させて頂いたり、それを実践したりして、勉強になりました。今までに見たことのない実践で、とても斬新でした。個々になりそうなものをグループ全体ですすることで意欲面や達成感をより味わえると思いました。有難うございました。

・実技を通して、スモールステップでの学習をしていく重要性を学びました。現場では、得意な子や苦手な子が様々な状態での指導になるので、どちらの生徒も楽しめるような環境がすごく大事になると思います。そのため、スモールステップで行っていくと、苦手な子でも徐々にできるようになる喜びというものを味わうことができ、得意な子はどんどん新しいことに挑戦できるので、とてもいい授業づくりだなと感じました。それに加えて、発問の中から生徒に気づかせるということも、これからの学習に必要なだと改めて思いました。

キ．幼年体育分科会

井上 みなみ（幼年体育プロジェクト）

①分科会Ⅰ

塩田先生による、入門提案。『幼児期の運動あそびで育つ力と保育者の願い』

ここでは、保育者の押し付けになっていないか？子どものやりたくなるような主体的な活

動になっているだろうか？発達を踏まえた活動になっているのか？など、私も含め、参加者の先生達も自分のしていることを振り返る場になったのではないかと思います。保育において、発達を知ることは子どもを理解することにとっても大切なことです。そこで、今回の実践提案である3歳児の特徴的な姿を参加者の先生達からも出してもらい、3歳児の姿を確認しました。

そこから日下先生の実践提案『3歳児のボールあそび』へと繋がっていきました。日下実践は、子どもの姿から次の展開を考え進んでいきます。うまくいかなかったことは次へ生かし、どんどんおもしろくなっていきます。3歳児は経験したことが遊びとなっていくます。2月に節分の鬼が来たところから、「オニのごっこあそび」が始まり、ボール遊びとも絡ませていきます。的を工夫し、達成感を味わえたことで子ども達から「もっとしたい！」という思いを引き出しています。また、的を置く場所、的の種類によって投げる必然性ができ、色々な投げ方を子ども達が自ら発見していきます。また、その都度、子ども達の声の拾い、「どうやったらできたのか」など、みんなを確認していました。ごっこ遊びの中で「オニをやっつける」という目的もはっきりしていることから、3歳児の子ども達にとっておもしろいと思える遊びになったのだと思います。

塩田先生から、4歳児、5歳児でのボール遊び実践（吉岡実践）も紹介してもらい、3歳児の子ども達が今後どう育っていくのかなども一緒に学ぶことができました。

「子どもの願い、興味や関心、その年齢によって子どもが“おもしろい！”“楽しい！”と感じることを感じ取れる大人でいたいと改めて思いました」と、感想をいただきました。日下実践では保育者のあり方も深く考えさせられました。

②分科会Ⅱ

塩田先生による実技では、ボールは使用せず「投げ動作」を伴う遊びをしました。ジェット風船、紙風船、メンコ遊び、ストロー竹とんぼをしました。幼児期の子ども達にボール遊びで必要となってくる動きを教え込むことは案外簡単なかもしれませんが、子ども達が楽しみながら自ら力を獲得していくことに着目すると、たくさんの工夫がいるなと思います。塩田先生の実技では、その工夫、楽しさを学びました。参加者の先生達からも自然と笑い声が聞こえてきた実技となりました。

次に、日下先生による模擬保育実技。日下先生がしてきた遊びを実際体験しました。ここでは、参加者の先生達から「こうした方がおもしろいんじゃない？」「これは難しいね」「これおもしろい！」と色んな意見が出ました。おもしろい遊びがあると思いが出やすいのは大人も同じだなと感じました。

最後に、参加者の先生のナイスパスで、全員の方に発言してもらえました。どんな分科会にしたいか幼年Pで何度も話し合い、悩みながら当日を迎えたので、参加者の先生達から色んな意見が聞けて本当に良かったです。

ク．健康教育分科会

佐々木盛文（南河内ブロック）

（１）分科会Ⅰ

○はじめに

参加者は7名（途中から1名追加参加）。参加者の思いとしては「実践がしたい」ということであった。実践するために何が必要なのかを知りたいという思いが多かった。

○入門提案

「早寝、早起き、朝ご飯」に代表されるような自己責任論が蔓延している。その延長線上に各家庭のしつけまで口を出し始める政権の

姿がある。学校現場では教師の序列化が進んでいる。給食の残食調べもその一つ。そんな中で実践することの意義は、子どもも教師も「主体者」として社会に参画する意欲が自然に高まってくる⇒学ぶこと で自由になるからである。

① 根源的な問いを大切にする

② 子どもと「対話」することを大切にする

③ 自己責任とすることに疑う姿勢を大切にする

以上が実践をするときに大切にしたいこととして挙げられた。

○実践報告

小2一年間の実践。荒れている子どもたちと教師との関係性に悩みながらの取り組みであった。「すいみんの授業」「みんなどこからの授業」など、チャンスをつかいがいながら参観や節目の時期に行った。1年時は「プライベートゾーンは見せたり、さわったりしません」という指導だけに終わっていたところを「なぜ」にこだわって授業を進めてきた。四苦八苦しながらの実践であったが、保護者との関係を作れたこと、実践を書くことで気になる子どもを客観的に見ようとして、あらためて本当の姿や思いが見えてきたことが成果として挙げられた。討議では、以下のことが話し合われた。

●実践者が子どもたちの様子をしっかりとらえていた。相担との関係性で思うように実践に移せず苦労していた。教材の良さはもちろんだが、子どもの様子を把握することを大切にしたい。学力の低い子ども、生活環境の悪い子どもが健康教育実践では活躍できる。生命の危機に関する感受性が高く、きびしい生活を送っているから。

●みんなの中で自分のことが話題にもらえることのうれしさ。

（２）分科会Ⅱ

○上野山講座

分科会の参加者が受け持つ子どもたちの苦しい生活実態が語られ、その子どもたちにこそ本音で語ることができる健康教育実践をしてみたいという思いから講座が始まった。その子どもたちに「エイズ実践」をどのように指導していくかが語られた。

○まとめ

佐々木実践報告、上野山講座から「実践をするときのヒント」をたくさんもらった。自分の健康問題と社会問題とつながっているから、もっと社会に目を向けて自分の体を見つめられる子どもたちを育てていかななくてはならないと感じた。子どもの孤食が進んでいるのはいつでもどこでも何でも食べられてしまう社会になったからだ！…という上野山さんの論に納得した。

ケ．グループ学習分科会

白山 承郁（関西大学）

私はグループ学習に対して、子どもたちの対話づくりであり、他者の思考にふれ、学びに気づく幅を広げる役割がある印象を持っている。しかし、利点がわかっていても、使いどころやタイミングがわからないのが正直なところであり、疑問に感じていた。今回の実践報告を通じて、グループ学習の有効活用場面と方法について学ぶことができた。

以下そのことについて述べていく。

はじめに入門提案では、グループ学習の意義について追及した。グループになることは、異質集団になることであり、学級や学校構造の縮小版だと言える。ここでの子どもたちとの向き合い方から、クラスづくり・組織作りにつながっていくのだ。ここでの教師としての役割は、「何を教えるか・教えたいか」を明確にすることである。これが、全体の道標となり、そこからグループごとの課題・興味に

即し、学習活動が進んでいく。子ども間での教えあいや学びあいが生まれるのは、共通の探究心が生まれやすいグループの利点である。しかし、これはいくつかの条件のもと、グループが成り立つことを意味している。

次に、上記のいくつかの条件についてまとめていく。これは、入門提案と実践報告から出てきた意見をもとにしているが、主に、グループ学習の成立条件は、人数・段階・共有の3つである。

1つ目は、構成される人数のことである。今実践では、種目や学級人数により3人が適正だと判断された。編成に関しては、日常観察や授業での話し合い時の言動・役割など、些細なことでも拾い上げることが要求される。今実践者の山本先生は、子どものささやき声や綴った文章から多くの情報を読みとっていた。それが、結果的に子どもたちと相談しながら、グループを決めることにつながったのであろう。

2つ目は、グループ学習を取り入れる時期・種目の段階である。集団において効力を発揮するグループ学習だが、集団の成熟度や単元分野を見誤ると、その後の学習活動や組織作りに悪影響を及ぼす。例えば、集団の早熟期に優劣のつきやすい種目をするのである。これは、勝敗の意識を芽生えさせ、「できる・できない」の視野が広がってしまう。これに対し、二学期ごろに集団の学びの高領域にある運動会・文化祭の学校行事があるのは、グループ活動の成熟が関係しているかもしれない。

3つ目は、共有である。今実践では、各授業での子どもたちの課題・発見と気づきを綴り、全体への共有をもって、個人・グループの学びを深めあった。結果的に、学級全体として発問が、でやすい環境に変化した一因といえる。ここでの先生の役割は、子どもたちの気づき・学びから教える内容へ変換するこ

と。そして、全体共有のパイプ役になることである。

最後に、これら3点を踏まえ、グループ学習の意義とは、集団においての個人の課題と集団の課題を見つけ、両方を解決するプロセスを学ぶことである。グループ活動の中では、グループにとっての個人と個人にとってのグループの視点が存在する。その中で、存在意識（人数）、個性による役割（段階）、相互承認（共有）、が子どもたちの実感として生まれることにより学びのサイクルが回る。

このように考えると、グループ活動を取り入れる前段階においての学習やクラスの雰囲気、日常生活の蓄積の重要性が浮き彫りとなる。学びの時系列から見る横断的な視点が、グループ学習の質を変えらるゝといえる。

コ．授業づくり分科会Ⅱ

①船富公二（泉州ブロック）

②牧野満（奈良ブロック）

（1）ボール運動（足）

参加者が予定より下回り、実行委員の応援で提案者を含めて9名。実行委員のメンバー以外は「じゃまじゃまサッカー」が初めてのメンバーであったが、なかに中学校の体育教師を目指す学生さんが2人。

『提案の流れ』

- ① 参加者が揃うまで、ボール操作のしかたの紹介とボール操作遊び。失敗しても何度でもトライできるルールの大切さ。
- ② チーム分け：チームの作り方と学習ノートの使い方。
- ③ 「じゃまじゃまサッカーⅠ」＝攻め全員ボール保持（ボール3個）バージョン。低学年ではゲームを楽しむことに重点をおき、楽しめない児童への配慮とグループ学習の進め方。
- ④ 「じゃまじゃまサッカーⅡ」＝攻め3人で

ボール2個バージョン。経験者ばかりがボールに触ることがないように配慮したルール。教師から「パス」の言葉を使わないことの大切さ。

- ⑤ 「じゃまじゃまサッカーⅢ」＝攻めボール1個。ここでは、高学年のバージョンを紹介してしまった。i) じゃまゾーンからもシュートできる。シュートゾーンには「味方がパスを出した後に入る」。ルールを紹介 → i) 防御はシュートコースを抑える課題。ii) じゃまゾーンを2倍の長さにして、防御2人が横並びから前後の位置に入り、内線防御＋内角防御のコンビネーションで守る。
- ⑥ 斜め後方からのパスに、i) ターンしながらのトラップからのパス。ii) ボールの進入コースに軸足を置いてボールが軸足に触れる直前のダイレクトシュートを兼ねた「ひし形練習」。「⑤」の紹介前に、ある場面を図示し、「ボール保持者のあなたは どうしますか？」を問う授業の進め方を紹介した。

初心者ばかりの参加者に、「授業計画を考える」といった余裕のある提案内容にすべきであった。端折りすぎたように思う。

＜参加者の感想から＞

・サッカーは、今一番習い事している子が多くて、そのぶん技術の差がすごく大きい競技だと思っています。そのなかで「コーチ会議」などを使って、子ども自身が仲間を上手に使ったり、練習させたりという形をとっていくと、上手な子の更なるスキルアップにもなるし、未経験の子も参加しやすかったり、自分の存在意義を認めやすくなるのかなと思いました。4人という少人数のチームも、攻めが全員ボールを持つというのも、みんなが必ずボールに触れるので、いいなあと思います。ありがとうございました。

・今日は大変勉強になりました。体育研究同志会の行事に参加させていただいたのははじめてですが、今後も参加させていただきたいと思います。

サッカーの授業作りでは、子どもたちにつけたい力が明確で、そのめあてに応じた授業、練習内容が組み立てられていて、ただただ、すごいなあ！！と思いました。自分にはここまで工夫された授業を組み立てることは難しいですが、船富先生に教えていただいた授業を自分のクラスでもためしてみたいと思います。

何より今日はボール運動の苦手な私が楽しく、そしてレベルアップした気がしています。ありがとうございました。

（２）水泳

実技がないということで、座学の講座となった。参加者 7 名。講座の流れは、現在の水泳が置かれている状況（コロナ禍での授業中止、プールの老朽化に伴う民間委託の問題）について問題提起した後、素朴な疑問「なぜバタ足？」「なぜ能力別指導？」について話を進めて行った。ドル平誕生の背景、近代泳法の発展史、日本泳法とは、ドル平から近代泳法、日本泳法へのステップなどについて、参加者が退屈しないように、映像をたくさん用意した。ドル平については一定の理解はしてもらえたと思うが、今年は実際に泳いでいないということもあり、なかなか授業場面での論議には至らなかった。一方的に聞かされるのは、参加者の立場ではつらいものがあっただろう。やはり、水泳は実技に限る。

＜参加者の感想から＞

・最低、それなりの歴史や水に関する科学を知っていた方が指導の場面で役に立つということを非常に実感した時間となりました。ドル平については全く知らなかったのですが、

ドル平から近代泳法への指導のプロセスを詳細に教えていただいたおかげで、ドル平の有効性について理解ができたので、実際に現場で役立てたいと思います。本日はありがとうございました。

・今日はありがとうございました。昨年度をふり返ってみると、教材を理解できていないまま指導していたなと反省しています。改めて、水泳の歴史や水の科学、ドル平のお話などを聞かせていただいて、子どもにつけたい力を再確認できました。特に、水の中で息を止めるという指導は正しく教えて行きたいと思いました。私が小学生の時、毎年服を着たまま水泳をする授業が設けられていましたが、水災に備えるためにも泳ぎは習得させていきたいなと、一個人として思いました。何より、子ども達の関わりを深める 1 つの教材として考えたとき、やはり能力別指導ではなく、一斉指導の中での、ペア、グループ活動を進めて行く必要があると思いました。